

宮本常一と縄文文化

— 食の問題を中心に —

板垣 優河

1. はじめに

筆者が勤務している宮本常一記念館（以下、記念館と略す）では、日本を代表する民俗学研究者・宮本常一ゆかりの資料を保管し、展示している。宮本は1907年に山口県大島郡家室西方村（現周防大島町）に生まれた。1923年に出身し、大阪で郵便局員や小学校教員を勤めた後、1939年に渋沢敬三が主宰するアチック・ミュージアム（後の日本常民文化研究所）に入り、日本の各地で民俗調査を行う。戦後は全国離島振興協議会や日本観光文化研究所、日本民具学会等の設立に携わり、また九学会連合による対馬・能登・佐渡・下北の総合調査に参加した。1965年には武蔵野美術大学の教授に就任し、有形文化、特に民具の調査研究に取り組む。1977年に同大学を退職した後は周防猿まわしの会の支援や東和町郷土大学の設立などを通して地域文化の復興と発展に尽力した。さらに、海からみた日本文化の形成について構想を進めていたが、その半ばで1981年に73歳で亡くなった。

記念館にある資料を大別すると、「文書資料」「蔵書資料」「写真資料」「民具資料」になる。「民具資料」を除く大半の資料は、1999年3月に宮本の遺族が東和町（現周防大島町）に寄贈したものである。それらをまとめて、「宮本常一関係資料」と総称することができる（板垣 2024b）。これを本論の主たる観察・分析の材料とする。

ところで、筆者の専攻は考古学であり、縄文時代の植物採集活動について、民俗学的手法も援用しながら研究を進めてきた（板垣 2024a）。その観点から宮本の資料を紐解くと、彼が縄文時代の研究に少なからず貢献をしていたことに気付く。加えて、彼は農耕の起源問題について興味深い思索をめぐらせ、縄文時代の農耕形態にもたびたび言及していた。しかし、そうした仕事は、これまであまり認知されてなかったようである。

そこで本論では、宮本が提起し、また示唆を与えた縄文文化の見方を検討する。これにより、宮本民俗学の奥行きを深さを示すとともに、学際的な視野で縄文時代の研究が一層活発化していくことを期待するものである。なお、本論は2023年に周防大島町東和総合センターで筆者が行った令和5年度宮本常一記念館公開講座の第1回講義「和食文化の源流を求めて—山村の植物食を中心に—」（9月30日）と第2回講義「宮本常一と縄文農耕論」（11月3日）を骨子としている。

2. 「飢餓からの脱出」という視点

宮本の縄文文化観に通底しているのは、「飢餓からの脱出」という視点であったと筆者は考えており、まずこの視点を未完の原稿によって示しておきたい。この原稿は1968年以降の作成と推定され、

「日本の食生活」(宮本 1978)とともに『宮本常一 飢餓からの脱出』(宮本 2012)として印刷に付されている。

原稿は「人間の歴史は飢餓からの脱出の歴史であったとっていい」という一文で始まり、「飢餓からの脱出のために、食料確保の方法を考え、作物の育成を工夫し、これを災害から守り、また交易によって有無を通じた歴史が人間の歴史であった」とする(宮本 2012:8-9)。民衆の歴史を生きるための技術や戦略から捉え直そうとしているが、これは飢餓がより身近にあった縄文時代を考える場合、重要な視点と思われる。昭和 30 年以降、日本人は一応飢えから解放されたといわれるが、それまでは飢餓克服のための歴史が長かった。宮本は最古の飢餓痕跡として、神奈川県横須賀市平坂貝塚で発掘された縄文早期の人骨のストレスマーカーを紹介している⁽¹⁾。

その後、農耕の術を知っても飢餓から逃れ得なかったのは、「新しい食料確保の技術が発達すると、生活安定が見られ、生活が安定すると人がふえ、人がふえると飢餓がおそってくる」という構造的連関を克服できなかったことに原因があるとする(宮本 2012:28)。飢餓のリスクを低減するには、食料を農耕生産物だけでなく自然採取物にも頼る必要があり、「原始的食物採取の時代はつい最近までつづいていたという事実を見のがしてはならないとともに、自然採取生活の中には原始の生活法がなお残存していたと見て差支えないのではないか」とする(宮本 2012:29)。これも重要な指摘である。『開拓の歴史』では、東日本を中心にトチやナラ、イモ類などを搗き潰し、餅の形にして食べてきたのは「自然採取時代の食法の名残り」であり、「古い生活がそのまま農耕生活のなかに介在し、また農耕生活を支えてきたのであって、原始的な生活態度や方法が、新しくなって行く生活のなかにのこされてきた」と書いている(宮本 1963:20)。縄文的な生活様式は比較的近い過去まで残存したが、それは生きるための必要から、残るべくして残ったというのである。

また原稿では、人びとが少数家族制を採用し、生産単位である家が生産能力を失った場合にそれを解体し、あるいは群れから離脱しようとしたことも、飢餓抑圧のための工夫であったとする。こうした生存戦略は、縄文時代から受け継がれてきたものであり、「縄文文化の時代はきわめて流動性がつよく、その次に来る稲作を中心にした弥生式の定住性の高い文化の中でもなお、稲作に主力をおかない社会ではこの流動性を失わなかったのではないか」と述べている(宮本 2012:32)。

宮本は、定住的な稲作農耕民に対し、その外縁にいて狩猟や漁撈、畑作などを営む人びとを流動的な存在として捉えていた。そして前者が生産の主座につくことによって統一ある文化が生まれ、国家が形成されてくると認識しつつ、後者が日本文化の形成に果たした役割も重視している。『山に生きる人びと』(宮本 1964a)や『海に生きる人びと』(宮本 1964b)は、そうした存在に焦点をあてた著作として読むことができる。

さらに、上記の「流動性」が日本において長らく維持された背景として、宮本は島国日本という環境特性をあげている。「島であるために一つの封鎖された社会であり、異民族の征服によって文化の主体性を根底からくつがえされるようなことはほとんどなかった国である。したがって部分的には大陸および西欧文化の影響をつよくうけて来たけれどもそれによって文化が本質的に変化していったと

は考えられない。それにもかかわらず、強い流動性をもっていたのは、島であることによって一つの完結した社会であり、その限られたものの中で問題も発展し、また解決しなければならなかった。そのことによって島全体を一つの解決の場としたのである」と述べている（宮本 2012:33）。

近現代の民俗例をもとに縄文時代の生業を考える場合、自然環境の類似性や文化的伝統の連続性、そして生計維持の必要性を、まずは検討しなければならない（板垣 2024a）。その点でも、宮本の過去の捉え方は極めて示唆に富むものである。

原稿の出版に際して再録された「日本の食生活」は、「ひもじい思いから抜け出て、腹いっぱい食べ、さらにうまいものを食べる機会を持つまでに、一般の民衆はどれほど長い道を歩かねばならなかったか」という視点で書かれており（宮本 1978:43）、「飢餓からの脱出」のテーマとも重なる食生活の総論として読むことができる。日本人全体が米を食べるようになったのは、戦時中の食料統制によって配給米制度が確立されて以降だが、「昭和二十年以前には日本各地に米食以前の食生活の様式が残っており、それはそれぞれの土地で生産されたものを中心にしていたものであった」という（宮本 1978:14）。米食普及以前は魚介類を主食化することもあり、能登では「タラ飯」と称してすり潰したタラの身をご飯代わりに食べ、対馬ではイカが大量にとれると、他のものはほとんど食べず、1週間そればかりを食べることもあった。しかし、より重要だったのは、サツマイモ・ヒエ・ソバ・ムギ・トウモロコシなどの栽培植物、またトチ・ドングリ・ワラビ・ヒガンバナなどの採集植物であり、「いわば日本人は植物性の雑食に長い間慣らされて来た国民であった」と述べている（宮本 1978:16）。

この見解は、豊富な旅の経験に基づいたものだった。記念館には 1980 年 12 月 10 日に日本工業倶楽部で行われた「食の文化」講演会に際し、宮本が準備していた講演メモがある（文書 3-5/0035/01/00）。そこには「旅さきでたべたもの」として、次のように記されている。

屋久島…サツマイモとムギ　大隅半島…サツマイモ、イノシシノニク（大浦）、ゾウスイ
米良…イノシシノニク　大分赤崎…ムギダケノメシ
土佐…トウモロコシの粉、ヒエメシ、サトイモ、トーフ（田楽）、ムギ+アズキ、シレーモチ
出雲…ムギ　広島山中…米+ムギ+ダイコン、ガワモチ、シイナ+リョーブ+ヨモギ
大和山中…サトイモ、デンガク　静岡…サトイモ　福井山中…トチモチ　能登…タラメシ
山梨…ソバ　埼玉…ホウトウ　下北…ソバ　対馬…ムギ、イカ、イモ

同講演で宮本は、1939 年頃から本格的に旅をするようになり、千軒もの民家に泊めてもらったが、そこで食べさせてもらったのは米の飯ばかりではなかったと振り返る。そして、「平地で米をつくっているところの人は別として、それ以外のところの人たちは米ばかり食べていたのではない、日本の食糧構造は全く植物性の雑食から成り立っていた」と述べている（宮本 1981a:111）。

3. 遺跡の発掘調査と理論的基盤への貢献

宮本は、過去の生活が現在の生活にどのように反映されているのかを見定めるには、民俗学をもっと幅広いものとして捉える必要があり、「考古学的な資料すらが民俗学的に見てゆく材料になる」と

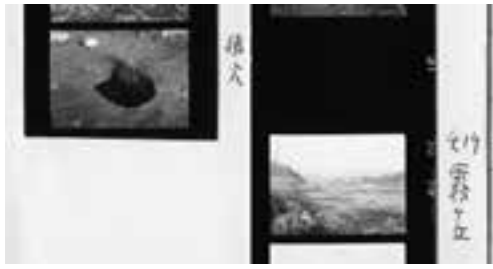


図1 霧ヶ丘遺跡の「猪穴」(写真帳 123)

考えていた(宮本 1972:1)。そのため、武蔵野美術大学では教育活動の一環で遺跡の発掘調査にも携わっている。それも縄文時代遺跡の発掘が目立つ。

まず 1968 年 7・8 月に神奈川県横浜市港区に所在する宮の原貝塚を発掘した。ここでは 1966 年頃から武蔵野美術大学の学生が調査を進めていたが、その動機となったのは、宮本が学生に課していた民俗学のレポート

を書くことだった。調査の結果、マガキとハイガイを主とする貝層が検出され、また縄文早期末と中期初頭を主とする土器が出土し、特に五領ヶ台式土器の研究を前進させる資料が得られた(武蔵野美術大学考古学研究会 1972)。

続いて 1970 年 7 月から 1971 年 4 月にかけて、横浜市緑区に所在する霧ヶ丘遺跡を発掘した。その結果、縄文早期後半を主とする土坑が 123 基検出され、イノシシ等を陥穴によって捕獲する狩猟場の存在が明らかにされた(霧ヶ丘遺跡調査団 1973)。宮本も当初からこれら遺構を陥穴と考えていたようで、記念館で保管している彼の写真帳にも、1971 年 4 月 19 日に撮影した遺構写真の付近に「猪穴」という書込みがみられる(図 1)。以降、東京都多摩ニュータウン遺跡をはじめ全国各地で陥穴と目される遺構の検出が相次ぎ、宮本らによる霧ヶ丘の発掘は、日本で初めて狩猟の場と陥穴の実態を明らかにした調査として評価されることとなった。

1976 年 4 月には東京都町田市の能ヶ谷遺跡を発掘し、弥生後期の住居址 1 軒と古墳後期の住居址 2 軒、また縄文早期前半～中期後葉の土器などを検出した。発掘調査報告書には、遺跡付近の民家の分布や間取りなども併せて載せられている(テム研究所編 1976)。報告書としては異例のまとめ方だが、これは宮本らが現状を知ることで過去の人びとの生活態度を探りあてることができると考えたことによる。宮本は考古学という枠の中だけで発掘に取り組んでいたわけではなかった。

1976 年 10 月から 1977 年 8 月には埼玉県秩父郡吉田町(現秩父市)のわらび沢岩陰遺跡を発掘した。記念館では同遺跡調査会が 1977 年 1 月に作成した「わらび沢岩陰遺跡第 1 次調査の概要」(文書(移動分)0323/01/00)と 1978 年 2 月に作成した「わらび沢岩陰遺跡第 3 次調査の概要」(文書(移動分)0323/02/00)、また宮本が調査会長として提出した埋蔵文化財発掘届の写しを保管している(文書(移動分)0323/02/03)。それらによると、この遺跡では縄文早期から弥生中期までの各時期の土器や石器、獣骨、貝類、クルミ核破片、また弥生時代の小児人骨などが出土したようだ。

このように、宮本は発掘調査を通じて縄文時代の研究に貢献していたが、理論面での貢献も少なかった。例えば、坪井清足が『岩波講座日本歴史』に発表した「縄文文化論」には、宮本から得た示唆が散見する。この論文では中部高地で縄文前期末から大型環状集落が出現した背景を「ある種の農耕技術の導入」に求め、それを受けて繁栄した中期文化のその後の凋落現象を、人口飽和状態における「外的な環境の変化」によって説明する(坪井 1962:127-128)。この論理展開は、宮本が調査していた瀬戸内海島嶼部における甘藷栽培の導入と、それを受けての人口変動を参照したものだった。

それ以降、中部高地における縄文時代の集落数・住居数の顕著な増減は、人口増加と環境悪化の連関からくる経済的圧迫によるものとして説明されてきた。

また、この論文では、滋賀県滋賀里遺跡などの縄文晩期土器のなかには、東北の大洞 C1 式までの亀ヶ岡式土器が少量混入することを認め、一方東北でみられる工字文系土器文様を、近畿から中部にかけてみられる文様の影響下で発達したものとする（坪井 1962:136）。東北日本と西南日本は、縄文・弥生文化の交替に多少の時間差を挟みつつ相互に交流をしていたというのだが、これも宮本の調査から少なからず示唆を得ていたようだ⁽²⁾。

宮本の調査資料を紐解くと、地域で営まれていた生産活動や生活に関する実際的な記録が頻出する。それらは考古学の分野でも有用度の高いものであると筆者は考えている。

4. 宮本の縄文文化観

「飢餓からの脱出」の原稿からもうかがえたように、宮本は縄文時代を、かなり流動的に人が動いた時代とみなしていた。『村のなりたち』では、村の本来的な姿を「群」、すなわち「移動をこととするグループ」とし、「私が群の移動を重要視するのは、縄文時代という長い時代に資料採取を生活手段として生きている者が、一カ所にそう簡単に定住したとは思えず、食物を追うて徐々に移動したことが同一様式の土器をある一定の地域に分布せしめた理由ではないかと思っているからである」と述べている（宮本 1966:35）。ただし、霧ヶ丘の発掘を通して縄文人は従来の想定以上に定住的であったとも考えるようになり（宮本 1973b:2）、後には縄文人が早い段階で定住的な生活を営んでいたことが、稲作農耕をスムーズに受容できる素地になったとも述べている（宮本 1980:119）。

さて 1960 年代に入ると、宮本は平地の稲作文化と対照させるかたちで、山地における畑作文化の存在を強調し、またその源流を縄文文化のなかに求めるようになる。

『山に生きる人びと』では、1961 年 8 月に高知から大阪まで飛んだ際に見下ろした人文景観について、次のような観察と読解を行う。「水田は土佐湾の沿岸から平地のすべてをうずめつくして、山と山の間の谷へ食い入っている。谷のあるところどこまでもつづいていてきれるところがない。どの谷もどの谷も平地からずっと田がつづいている。水田が平地から次第に山中に浸透していった姿をうかがうことができる。そしてところどころに集落がある。水田耕作をして生計をたててい



図2 上空から見た田畑の分布

るわけである。ところが谷の行きづまり、または谷と谷との間の山地のやや傾斜のゆるやかなところには畑のひらけているのが見られる。畑と田の間は傾斜が急であるか森林になっていて、田と畑はつながらないで分布しているところがすくなくない。その畑のほとりに家がある。水田のある谷では農家はだいたいかたまっているが、畑のひらけたところでは農家は散在したものが多い。田と畑の間には断絶があり、また田と畑の地帯では住み方もちがうのである」(宮本 1964a:20)。平地と山地では生産様式を異にする人びとが住んでおり、両者は明瞭に棲み分けていたというのである。図2はその時に撮影した写真の一部である。

1968年3月に発表した「山と人間」では、改めて水田地帯と畑作地帯の断絶を指摘したうえで、後者では水田耕作を行わずに定畑や焼畑耕作によって食料を得ていたとし、「そこで少し突飛な想定であるけれども、縄文式文化人がやがて稲作文化をとりいれて弥生式文化を生み出していったとするならば、それはすべての縄文式文化人が稲作文化の洗礼をうけたのではなく、山中に住む者は稲作技術を持たないままに弥生式文化時代にも狩猟を主としつつ、山中または台地の上に生活しつづけて来たと思われるのではないかと思う。この仲間は縄文式文化時代にすでに畑耕作の技術は持っていたのではなかろうか」と述べている(宮本 1968:263)。

続いて早稲田大学講義ノート「習俗伝承の本質と変遷」では、「日本における基層文化は、農村文化であり、農業文化であったと断言したい。その農村文化であり、農業文化は、今から一〇〇年前まで、ずっと約五〇〇〇年ほど、縄文時代頃に農業が起ったと考えて、その間の文化の蓄積がつくりあげてきた習俗とその根の強さが、今のわれわれの生活を支配している断言したい。(中略)日本の農耕のはじめは、私は稲作ではなくて、畑作が存在したと思う。縄文中期のころから、農耕は芽生えてきておったとみられるが、これは畑作だった」と述べている(宮本 1973a:204)。

宮本の縄文文化観は、晩年に構想していた「日本文化形成史」にも見ることができる。これは日本にはどのような人びとが先住・渡来し、大陸からの影響を受けつつ、いかなる文化が形成されてきたのかを示したユニークな仮説である。宮本の没後刊行された『日本文化の形成』は、1979年7月で筆が止まったままの遺稿と、日本観光文化研究所で1979年7月から1980年9月にかけて行われた「日本文化形成史」と題する都合11回の講義録からなる。遺稿では、日本列島に古くから住み、狩猟や漁撈にしたがったのは「縄文文化人」であり、その伝統を保持していたのが「エビス」と呼ばれる人びとだったとする。そして「もっと広い視野で日本の文化を見直す必要があるのではなかろうか。そのためには日本文化の基盤をなした縄文文化と縄文文化人の変遷をもっと丹念に見てゆく必要がある」とする(宮本 1981b:74)。縄文文化を起点として日本文化の形成過程を見定めようとしていたことがうかがえる。そして宮本が考える縄文文化とは、ある面においては農耕文化、それも畑作文化と呼べるものだった。次に彼がどのような縄文農耕を想定していたのかを整理する。

5. 宮本の縄文農耕説

縄文時代における農耕の有無、及びその実施形態をめぐるのは、戦前から議論が続いている。宮本

の蔵書にも『縄文農耕』（藤森 1970）がある。本書の発行は 1970 年 3 月 10 日だが、宮本は同年 3 月 29 日に入手している。「縄文中期農耕論」といった語に線引きがみられ、議論に対する認識は当然あったと思われる。実際に、宮本自身も早くから縄文農耕の可能性を示唆していた。

終戦直前の 1945 年 8 月 4 日に京都の東方文化研究所で行った講演「日本における食事情の変遷」では、縄文時代における稗食の可能性を示唆している（宮本 1977:15）。『中国風土記』では、縄文時代の打製石斧を畑作用の石鍬とみなし、「縄文式文化の時代にも畑作は行われていた」と述べている（宮本 1958:112）。『開拓の歴史』でも「打製石斧といわれるものは、畑耕作の場合、植穴など掘るために用いられた鍬先であったものもすくなくない」と見られる。それは片手持の小さい鍬であった。サトイモのようなものを植えるときにはこうした鍬が必要であった」とする（宮本 1963:24-25）。また同書では、ヒエを満州・朝鮮から日本にかけて野生していた種とみなし、「ヒエ以外の作物は畑の農耕技術とともに漢民族によってもたらされたものであろう。とすれば、日本における焼畑もその初めはヒエ作を主としたものであり、日本海をめぐるツングースの間に最初に発達を見た農耕技術であったかも知れない」と書いている（同前:31）。この稗作に重なるかたちで大陸からムギ・アワ・キビなどがもたらされたと考えていたようで、「山と人間」では「縄文式文化時代のおそらく中期以後には採取から農耕への移行が見られはじめており、それが自然発生的であるとともに大陸の大国の影響もうけはじめていたのではないか」と述べている（宮本 1968:265）。

もっとも、宮本は堅果類や根茎類といった野生植物の採集活動も重視しており、それを基盤として農耕が発達していったとも考えていた。「日本の食生活」では「ドングリ、栃にかぎらず、ワラビ根なども古くからの食べ物であったと思われる。それはおそらく自然採集時代一すなわち縄文文化の時代から食べ物として利用されたものであり、それが人びとのいのちをつないで来たものであり、焼畑耕作発生以前のものとして注目すべきものであろう」と述べている（宮本 1978:11）。特に火入れを伴うワラビの根茎採集については、「野生のものを管理し、それをとって食べるということは耕作以前の人間の工夫による生活方法ではなかったか」と指摘している（同前:13）。前掲の「山と人間」でも、自然採取と焼畑農耕の中間段階として、ワラビの根茎採集などに伴う山焼に注目し、「山焼を媒介とした焼畑農耕への移行は考えられないものであろうか。そして焼畑農耕の普遍化が、狩猟採取民をそのまま山間や台地の上に定住せしめ、水田稲作には直接影響されることのない生活をうちたてたものと思われる」と述べている（宮本 1968:264）。

『日本文化の形成』の遺稿では、焼畑を狩猟・採取の延長上で発生したものと考え、「山を焼くことによって野獣を捕えるのに便利であるばかりでなく、焼跡には食料に適する植物の生育も見られたのであろう。そうした経験が、焼いたあとへ一定の植物の種子をまいたり、あるいは根菜を植えるような作業を生み出していったのではないかと推測し、「自然採取→山焼・野焼→自然管理→焼畑→定畑」という農耕の発展段階を想定する（宮本 1981b:112-113）。また 1979 年 10 月 5 日に行った「日本文化形成史」の講義では、「縄文時代には、定畑というのはまだなかったと思うのです。つまり、ずっと開きっ放しでそこに次々に作物を植えていくような農耕というのは、これは弥生以後に始まったの

だと思います」と述べている（宮本 1981c:168-169）。縄文時代には農地を移動する形式で焼畑が行われ、弥生時代に稲作が普及するに伴い、畑作も焼畑から定畑へと進んだというのである。

さらに、1980年1月末に国立民族学博物館で行われた「日本民族文化の源流の比較研究」のシンポジウムで、宮本は次のような発言をしている。「やはり農耕以前を考えないといけないのじゃないですか。たとえば縄文時代における土器の発生というのは、堅果類を食べなければならなかったということ。そのためには、一度土器で茹でなければならなかったわけで、土器が必要になります。それから貝をたくさん食べる。これも煮なければ口を開かない。まずこのような条件が最初にあったんだと考える。そうしますと、たとえば堅果類のトチが個人所有になっている例が、戦前の越前あたりにありまして、お嫁に行くときにそのトチの木をもっていっております。トチの木などの管理というのは、非常に古い時代からあったのではなかろうかということがひとつ。（中略）私がおもしろいと思ったのは、野麦峠の東にある奈川村という所では、明治一六年ごろまではヒエはつくらず、もっぱらワラビの根を掘っているのです。それがいちばん重要な食物だったようです。そのほかソバも一部でつくられていましたが、とにかく野麦に行きますと、そこはヒエ作地帯なのにヒエをつくらず、ワラビ粉に依存して生活していたものがある。そうするとワラビの根を掘り、クズの根を掘って澱粉をとることも、「半栽培」とみて取り上げてもいい問題だろうと思うのです。もうひとつ、私が興味をおぼえているのはソバなのです。ソバは野生と栽培と、どこに、どれだけの差があるのだろうか。（中略）野生種を、今度は抱えこんで栽培化したものとするならば、ソバ栽培というのは、ずっと古くから日本に分布していたものではないだろうか。刈り取ってやりさえすればそれでいいような、手のかからない栽培植物が下敷になって、日本では縄文農耕が生まれてきたのではないか」（佐々木編 1983:490-491）。

宮本が最終的に縄文農耕の基盤として注目していたのは、トチの木などの管理と火入れを伴うワラビやソバの「半栽培」だった⁽³⁾。上の仮説は豊富な民俗調査から導かれたものであり、縄文時代の植物利用を考えるうえで参考になる部分が多い。特にワラビ根茎採集活動への注目はユニークである。

6. ワラビ根茎採集活動への注目

宮本は戦前から高知県幡多地方などで火入れを伴うワラビの根茎採集を見聞していた。その延長で、春に行われる奈良県若草山の山焼なども「曾ては切実なる生活手段として山を焼いた事が、奈良の地に於いては華やかなる年中行事の一つとして残つて居る」と観察している（宮本 1942:40）。その後、焼畑の前形式として、また縄文農耕の基盤として、ワラビの根茎採集に注目するようになるが、そのきっかけとなった調査は大きく分けて三つある⁽⁴⁾。

一つ目は、1946年に行った秋田県仙北郡檜木内村（現仙北市）の調査である。調査ノート「農村調査 秋田県由利郡矢島町 秋田県仙北郡角館町」（文書 1-1/0009/01/00）には、8月26日の見聞録として、「山ニ入り来ル途中、山ノ草刈場ノ所々ニ、土ノ赤クナツテイルノヲミル。ワラビノ根ヲホリタルナリトイフ。晩秋多クホリテ食料ニス。1村200俵ノ米、之ニヨツテ節約出来シトイフ」

と記されている。当地方では凶作に際し、ワラビの根茎を掘り、多量の蕨粉を製し、食料にしていたことがうかがえる。

二つ目は、1965年にパイロット林道（スーパー林道）建設に伴う経済効果予測調査の一環で行った長野県南安曇郡奈川村（現松本市）の調査である。「奈川村資料」（文書 4-1/0002/01/00）には11月7日の聞き書きとして、「ワラビノネホリ ハルアキヒヤクシヨウ仕事ノアイマニホツタモノ。ドコノヤマヲホツテモヨカッタ。人ノブラクヘイツテハイケヌ」とある。また『私の日本地図2・上高地付近』には、「奈川谷で明治時代まで焼畑以前の野焼によるワラビの育成や、焼畑にあってもソバを主として他のものはあまり作らなかったというようなことは自然採取から農耕への移行を示す過程を物語るものではないかと思って心にとまった」と書いている（宮本 1967b:5）。

三つ目は、1963年と1964年に九学会連合の総合調査に参加して行った青森県下北地方の調査である。その目的の一つは、稲作以前の古い農耕技術とその発達過程を見定めることにあった。当地方では明治後半に水田稲作が普及するが、それまで水田ではもっぱらヒエを作り、焼畑ではヒエ・アワ・ソバなどを作っていた。しかし、それだけでは食料を充足できなかったため、クリ・クルミ・トチなどの堅果類、そしてワラビなどの根茎類の採集活動が積極的に行われていた。調査資料「下北調査1

昭和38年度・39年度 むつ市」（未目録文書）には、1964年3月9日のむつ市城ヶ沢での聞き書きとして、「ワラビノ根ヲモトハヨクホツタ。（中略）モトハソノタメノ野ヤキヨシタ。ワラビソノモノモトル。田ウエガスムト、ナマワラビヲカマスニ10俵クライトル。ワラビヲトルトコロ、100町歩クライトツタトオモハレル。大キナワラビガトレタ。毎年ノヤキシタ。ワラビネハ、ドコヲダレガホツテモヨカッタ。ワラビホリノ日ハキメテオイテトル。サメヲアケルトイフ」と記されている。ワラビの採集地は広大で、どこを誰が掘っても良かったが、掘る日は「サメヲアケル」と称し、一種の「口あけ」も設定されていたことがうかがえる。宮本はこうした慣行に注目し、「ワラビの自生地は畑ではないが畑に準じて大切にされていた。そして畑地とちがうところは、畑地は個人所有になっているが、ワラビ自生地は部落共有だったことである。（中略）城ヶ沢ではワラビとワラビ根の採取は畑耕作に先行する生産様式であったことがわかる」と述べている（宮本 1965:126）。図3は1963年6月22日に宮本が撮影した青森県下北郡東通村猿ヶ森の写真である。ここでもワラビの根茎採集が盛んに行われ、奥に見える山は中腹まで草地化している。宮本は「山に木もなく、また茅草が丈高くしげっていないようなところはワラビが群生していたものであるという。（中略）猿ヶ森のあたりではそこが牧場になっていたが、昔はみなワラビの根ほりをしたところであった」と書いている（宮本 1967a:158）。

これら調査記録で注目されるのは、第一にワラビの根茎採集が、地域によっては畑作に劣らない食料



図3 青森県東通村猿ヶ森

獲得手段として行われていたことである。第二に、それを規模拡大的に行うために、採集予定地に火を入れ、畑同様に管理していたことである。宮本はこのような営みが縄文時代から行われ、農耕発生の一つの重要な基盤になっていたと推察する。

筆者も、岩手県北上山地や岐阜県飛騨地方、高知県四万十地方などでの民俗調査、また土掘り具と目される打製石斧、植物質食料の加工具と目される磨石・石皿類の使用状況調査などを通して、縄文時代におけるワラビ根茎の採集活動を想定している(板垣 2024a)。今後、推論の蓋然性を高めるには、古環境分析による採集空間の復元が必要である。

特に火入れの痕跡を調べるには、花粉分析とともに微粒炭量の分析が有効と思われる。滋賀県琵琶湖周辺では、約 1 万年前から 1,500 年前にかけて微粒炭量が著しく増加するため、この間に火入れを伴う人間活動が活発化したと考えられている(井上ほか 2001:102)。京都府深泥池でも、縄文早期に微粒炭量が増加するため、長期にわたって連続的に火が入っていた可能性が示唆されている(小椋 2002:276)。長野県飯綱高原では、約 3,000 年前からコナラ亜属の花粉と草本花粉が増加し、併せて微粒炭量も急増するため、この頃から火入れを伴う人間活動が活発化したと考えられている(富樫ほか 2004:8)。青森県亀ヶ岡遺跡では、微粒炭とともにゼンマイの胞子が多産するため、焼かれて草原化した空間にゼンマイが群生していたと推定されている(山野井 2015:221)。

これら事例にみる微粒炭量の増加は、縄文人が有用植物の採集空間を整えるために、積極的に火入れを行っていた可能性を示唆するものである。かねてより宮本が民俗学的に想定していたことが、古生態学的にみても首肯できることが分かってきたといえる。

7. おわりに

宮本は、日本人はそもそも植物性食料への依存度が高い民族であったと考えており、『風土と文化』では「日本の文化はその根底において植物的であり、しかも農民的であり、あらゆるものに飼育と再生の思考がひそんでいる」と述べている(宮本 1967c:10)。牧畜から発達してきたヨーロッパ文化に対し、日本文化は農耕から発達してきたというのである。そして、その発生基盤を縄文時代の植物採集活動のなかに見出していた。特に火入れを伴うワラビの根茎採集を、採集から栽培への移行過程を示す植物利用方式として、生態学的に、また社会経済的に位置付けた点はユニークである。

近年では植物考古学の進展により、縄文人は自然の恵みを享受するだけでなく、積極的に植物栽培を行っていたことが分かっている。しかし、植物栽培の前史として、植物採集活動の展開過程がきちんと示されることはほとんどなかった。その点で、宮本が提起した仮説は示唆に富むものである。筆者による一連の研究は、図らずもこの仮説を考古学的に検証するものでもあった(板垣 2024a)。

これまでの歴史教育(少なくとも筆者が 2000・2010 年代に学校で受けてきた歴史教育)では、弥生文化や農耕社会の成立の意義が強調される一方で、縄文文化や狩猟採集社会への眼差しは弱かったと思う。2013 年には「日本人の伝統的な食文化」として和食文化がユネスコの無形文化遺産に登録されたが、それも弥生以降の米を本位とする食事体系に関心が偏っているように見える。食文化研

究においても、縄文的な要素への眼差しは弱かったといえる。

宮本が遺した資料は、そうした傾向を是正し、日本文化の形成過程や構成要素を探りあてていくうえで、誠に重要な意義をもつ。今後は様々な角度から資料の利活用が進むことを期待する。自身の研究課題に取り組むべく資料にあたれば、新たな発見が得られるものと思う。筆者はそのような可能性を宮本の資料に感じている。

註

- (1) 記念館で保管している宮本の蔵書には、八幡一郎（1953）の『日本史の黎明』がある。本書をひらくと、「平坂人は思春期前、少くも数回に亘り、骨発育を一時停止せしめる如き重症を経過し、その第一回は乳幼児の頃であつたろう。…本人骨の骨発育は良く、格別な変形もないので、差当り飢饉の如き生活困難による栄養失調が最も問題になるのではないか」の部分に線引きが見られる。また同書の奥付付近には「1953.7.28.了（中略）この書よみつつ教えらるる所きわめて多し。文化の発達のを思い見てまさに悠久というべく且多くの困難と当惑とを克服して来たことを知る」との書込みがある。「飢餓からの脱出」という視点を形成するうえで、宮本がこの書から多くの示唆を得ていたことがうかがえる。
- (2) 宮本は秋田県仙北郡檜木内村（現仙北市）で実際にマタギに会っているが、そのマタギは、山中の道をたどりながら人里へほとんど出ることなく奈良県の大峯地方まで熊狩に行っていたという（宮本 1974:86）。坪井はこうした話を宮本から直接聞いており、後に「縄文時代の東北地方で作られた土器が近江や大和で出土するのは思わぬ媒介人がいたのではないかと考えさせられた」と述べている（坪井 1981:81）。
- (3) ここで宮本が用いている「半栽培」という語は、中尾佐助らが一連の照葉樹林文化論のなかで定着させたものである。宮本の蔵書にも『栽培植物と農耕の起源』（中尾 1966）、『照葉樹林文化』（上山編 1969）、『続・照葉樹林文化』（上山ほか 1976）などがあり、どの書にも線引きが多数見られる。
- (4) 宮本の調査記録から読み取れる堅果類・根茎類の食料化技術については、すでに別稿で分析しているところである（板垣 2022）。

参考文献

- 板垣優河 2022 「宮本常一関係資料からみた近代山村の植物採集活動」『文化と交流』No.6 宮本常一記念館
- 板垣優河 2024a 「縄文時代植物採集活動の研究」博士学位論文 京都大学
- 板垣優河 2024b 「宮本常一関係資料」『山口県文化財』第 55 号 山口県文化財愛護協会
- 井上 淳・高原 光・吉川周作・井内美郎 2001 「琵琶湖湖底堆積物の微粒炭分析による過去 13 万年間の植物燃焼史」『第四紀研究』第 40 巻第 2 号 日本第四紀学会
- 上山春平編 1969 『照葉樹林文化』中央公論社
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976 『続・照葉樹林文化』中央公論社
- 小椋純一 2002 「深泥池の花粉分析試料に含まれる微粒炭に関する研究」『京都精華大学紀要』第 22 号 京都精華大学
- 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 『霧ヶ丘』武蔵野美術大学考古学研究会
- 佐々木高明編 1983 『日本文化の原像を求めて 日本農耕文化の源流』日本放送出版協会

- 坪井清足 1962 「縄文文化論」『岩波講座日本歴史』第1巻 岩波書店
- 坪井清足 1981 「宮本常一さんの学恩」『宮本常一 同時代の証言』日本観光文化研究所
- テム研究所編 1976 『能ヶ谷遺跡』能ヶ谷遺跡調査会
- 富樫 均・田中義文・興津昌宏 2004 「長野市飯綱高原の人間活動が自然環境に与えた影響とその変遷」『長野県自然保護研究所紀要』7 長野県自然保護研究所
- 中尾佐助 1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 藤森栄一 1970 『縄文農耕』学生社
- 宮本常一 1942 「山焼」『奈良叢記』駸々堂書店
- 宮本常一 1958 『中国風土記』広島農村人文協会
- 宮本常一 1963 『開拓の歴史』（双書・日本民衆史1）未来社
- 宮本常一 1964a 『山に生きる人びと』（双書・日本民衆史2）未来社
- 宮本常一 1964b 『海に生きる人びと』（双書・日本民衆史3）未来社
- 宮本常一 1965 「下北における農耕技術の伝承」『人類科学』第17集 開明堂
- 宮本常一 1966 『村のなりたち』（双書・日本民衆史4）未来社
- 宮本常一 1967a 『私の日本地図3・下北半島』同友館
- 宮本常一 1967b 『私の日本地図2・上高地付近』同友館
- 宮本常一 1967c 『風土と文化』（宮本常一著作集第3巻）未来社
- 宮本常一 1968 「山と人間」『民族学研究』第32巻第4号 日本民族学会
- 宮本常一 1972 「序にかえて―宮の原貝塚発掘調査前史―」『宮の原貝塚』青友書房
- 宮本常一 1973a 『日本を思う』（宮本常一著作集第15巻）未来社
- 宮本常一 1973b 「序」『霧ヶ丘』、武蔵野美術大学考古学研究会
- 宮本常一 1974 「山人の道」『山の道』八坂書房
- 宮本常一 1977 『食生活雑考』（宮本常一著作集第24巻）未来社
- 宮本常一 1978 「日本の食生活」『食生活の構造』（シリーズ食文化の発見2）柴田書店
- 宮本常一 1980 「煮ることと蒸すること」『生活学』第6冊 ドメス出版
- 宮本常一 1981a 「日本人の主食」『東アジアの食の文化』平凡社
- 宮本常一 1981b 『日本文化の形成』遺稿 そしえて
- 宮本常一 1981c 『日本文化の形成』講義1 そしえて
- 宮本常一 2012 『宮本常一 飢餓からの脱出』八坂書房
- 武蔵野美術大学考古学研究会 1972 『宮の原貝塚』青友書房
- 山野井徹 2015 『日本の土―地質学が明かす黒土と縄文文化』築地書館
- 八幡一郎 1953 『日本史の黎明』有斐閣

図出典

図1～3 宮本常一撮影（宮本常一記念館蔵）